

# S. Donaudy “36 Arie di stile antico” 研究 V

— オペラ作品との関わりを視点として その3 —

枝川 一也

(2009年10月6日受理)

A Study on S. Donaudy “36 Arie di stile antico” V  
— Regarding his operatic works No.3 —

Kazuya Edagawa

**Abstract:** This paper examines the first act *Ramuntcho* (1921), an opera composed by S. Donaudy (1879-1925). Similar to his previous work *Sperduti nel Buio* (1907), *Ramuntcho* features a variety of tempos and dynamics that, together with the vast number of stage directions according to the script written by his brother A. Donaudy (1880-1941), seem to restrict both the performers and director himself. The influence of G. Puccini (1858-1924) is also visible at various times. The opera of *Ramuntcho* is based on the short story of the same name published in 1897 by the French writer *Pierre Loti* (1850-1923). A. Donaudy slightly modified some of the characters from the original short story as he searched for a manner to make the work viable as an opera. This work was adapted and filmed as a motion picture three times in France. I believe that the study and research of these works would prove to be of significant value.

Key words: S. Donaudy, opera, *Ramuntcho*

キーワード：S. ドナウディ、オペラ、ラムンチョ

## 1. はじめに

筆者は Stefano Donaudy (1879.2.21-1925.5.30) の 36 の歌曲集, “36 Arie di stile antico” (古典様式による 36 のアリア) の楽曲・内容分析を試みるために、様々な視点から考察を進めてきた。36 の歌曲集の中の数曲は、国内外で声楽家のレパートリーとしてしばしば演奏され、広く親しまれている。それに対して、彼がオペラ作曲家であったことはほとんど知られていないであろう。筆者は Donaudy の我が国における愛好家の広がりに対して、西洋諸国での関心が稀薄なこと、Donaudy に関する歴史的な文献資料、楽譜、詳しい先行研究がほとんどないことに研究の意義と必要性を感じている。演奏家の立場から、楽譜を手がかりに様々な角度から研究を進め、Donaudy の意図を明らかにしたいと考える。

Donaudy の楽譜上に細やかに書き記された多様な強弱、速度変化の指示、及び曲の色彩の変化を助言する発想標語について検討し、彼独特の作風、音楽語法を明らかにしたが<sup>1)</sup>、拙稿 (2003) の資料 1 ~ 資料 3 にまとめたとおり<sup>2)</sup>、歌曲に見られる多くの発想標語の用い方は、彼のオペラ作品に如実にその傾向を表す。更に、オペラにおいては、弟の台本作家 Alberto Donaudy (1880-1941) による莫大な数のト書き *didascalia*<sup>3)</sup> が作品全体を通して随所に付記され、動作、感情などを細かく指示していた。

演奏者は、兄弟の連携によるこのオペラ作品における多くのト書きと、音楽に付記された多様な発想、速度変化の指示に、拘束されると思われる。演奏者はその膨大な情報に対して、忠実な再現を試みると同時に、演奏者なりの音楽的解釈を加えていくことが要求されるであろう。

彼は生涯に6つのオペラを作曲した。第1作“Folchetto” (1892), 第2作“Scampagnata” (1898), 第3作“Theodor Koerner” (全4幕), 第4作“Sperduti nel buio” (全3幕 1907), 第5作“Ramuntcho” (全3幕 1921), そして第6作“La Fiamminga” (全1幕)である。

36の歌曲集の作曲された1918年は、第4作“Sperduti nel buio” (1907) と第5作“Ramuntcho” (1921) の作曲時期の間にあたる。従って、この2つのオペラについて考察を深めることは非常に意義深いことと考える。前項・前々稿の第4作“Sperduti nel buio” (1907) の内容分析に引き続き、本稿では第5作“Ramuntcho” (1921) について概観し、考察を試みたい。

## 1. Pierre Loti “Ramuntcho”

1921年3月19日にミラノのヴェルメ劇場で初演された S. Donaudy のオペラ “Ramuntcho” (全4幕) は、彼の他作品と同様、台本作家の弟 A. Donaudy との連携による作品である。原作は、フランスの作家 Pierre Loti (1850-1923) が1896年に書いた小説「ラムンチョ」 Ramuntcho である。Loti は約40年にわたって海軍の職に携わり、世界各国を周航してきた豊富な経験をもとに、異国情緒豊かな小説・紀行を執筆した。代表作に、長崎滞在と日本人妻との生活を素材とした「お菊さん」 Madame Chrysanthème (1885)、アイスランド近海を舞台に、大海に生きる人々の過酷な運命を描いた「氷島の漁夫」 Pêcheur d'Islands (1886) などがある。更に、「ロティの結婚」 Rarahu ou Le Mariage de Loti (1880) はレオ・ドリーブ作曲のオペラ「ラクメ」の原作となった。

「ラムンチョ」は、ピレネーの山々に埋もれたバスク地方の寒村を背景に、未知の国アメリカへの憧憬と、故郷の地に対する愛着に苦悩する主人公ラムンチョと許嫁グラシオーサの悲恋が描かれた作品である<sup>4)</sup>。

昼間はプロット球技 (Pelota: バスク地方の伝統的なスポーツ競技) の名手、夜になれば密輸業者と、二つの顔を持つ私生児ラムンチョは、強健で反骨心のある人物である。彼は3年間の兵役を終え故郷に戻るが、既に修道院に入っていた許嫁のことが諦めきれず、グラシオーサを修道院から略奪しようとする。しかし彼は、彼女を含めた修道女達の「白さ」「静かな白い力」<sup>5)</sup> に全身の感覚を奪われ、この計画を放棄する。

地球上のあらゆる海を巡り、その中に原始的な生の姿を探求した Loti であったが、古い慣習と宗教観、アフリカの南風とブルターニュの霧雨を併せ持つバスクの土地に心を惹かれた晩年の彼は、好んでこの地に

別荘を求め、この地で没している<sup>6)</sup>。

この作品は1897年に Henri Pène du Bois がニューヨークの R. F. Fenno 社より英訳書を出版、我が国では新庄義章が訳して、岩波書店より1955年に出版された。このような背景の中で、1921年に S. Donaudy の第5作目のオペラ “Ramuntcho” が初演に至ったわけである。台本作家 A. Donaudy がどのようにこの原作を捉え、兄 S. Donaudy と共にオペラという視覚的・聴覚的芸術の創造を試みたかを考察したいと考える。

## 2. A. Donaudy “Ramuntcho” 第1幕 あらすじ

	配	役
RAMUNTCHO	ラムンチョ	テノール
Lo zio IGNACIO	イグナシオ伯父	バリトン
II CURATO d'ETCHEZAR	エチエサル村の司祭	バス
FLORENTINO	フロレンティーノ	テノール
ITCHOUA	イチョウア	テノール
GRAZIOSA	グラシオーサ	ソプラノ
FRANCHITA	フランキータ	メゾソプラノ
La Badessa d'AMEZQUETA	アメケスタの尼僧院長	メゾソプラノ
DOLORES	ドロレス	ソプラノ
Suor VALENTINA	修道女ヴァレンティーナ	ソプラノ
La Nutrice PILAR	乳母ピラル	ソプラノ
Lo Scaccino	教会の掃除係 (寺男)	テノール
Un Ufficiale del Doganieri	税関吏	バリトン
Un Venditore d'Espadrille	エスパドリユの売人	テノール
Un Venditore di Sidro	シードル酒の売人	バリトン
Ragazze e Giovani Baschi	バスク人の若者たち	
Contrabbandieri	密輸業者達	
Penitenti	悔悛者たち	
Bigotte	偽善者たち	
Giucatori di Pelota	プロット球技の選手たち	
Suore	修道女たち	
Una Coppia di Giovani Sposi	若夫婦一組	
Un Vecchio Trombettiere degli Zuavi	年配のスワヴ兵のラッパ吹き	

舞台：フランス・バスク地方

舞台は九月の夕暮れ時、まるで辺り一面が大火事かのように明るく輝くエチュサル村のプロット競技場。舞台奥手に、エチュサル村の集落、遙か遠くには黄金色に染まったギスナ山の山頂が見える。フランス・エチュサル村の選手3人対スペイン・ウスルビリュ村の選手3人で繰り広げられている熱い試合を、無数の観客が懸命に応援し、すっかり興奮して言い争いになっている。闘牛観戦のような勢いで選手たちを煽ったり、褒め称えたりして、金貨を賭けている者も見られる。マルカドール(得点記録係)はフロレンティーノが務め、木製の高い椅子に座って得失点を告げる。フロレンティーノの周りには往年の名選手が伝統的な服装で数人座り、フロレンティーノに助言を与える役目をする。彼らはバスク民族全体の関心事であるプロット競技において、審判上の論争が起こった際に、自分たちの意見が尊重されることを誇りに思っている。この中でただ一人グラシオーサは、女友達の一団に囲まれて、エチュサル村の選手ラムンチョから預かった上着を大切に小脇に抱え、一心に試合を見守っている。当初フランス側は負けていたが、ラムンチョの攻撃によって引き分けに持ち込んだところで休憩となった。

この時グラシオーサの伯父、イグナシオが姿を現す。短い休憩時間中にイグナシオは、ラムンチョに植民地派遣の海軍歩兵隊募兵の書類を見せた。ラムンチョは嬉しい気持ちを胸に、以前にも増して活気の高まる競技場に戻る。それと同時に試合が再開された。もはや観客の全員が立ち上がって決勝の1点が入るのを待ちかたえている。猛烈な勢いでラムンチョが一発を投じ、フランス・エチュサル村チームを勝利に導いた。バスク地方の人々にとって、この伝統競技で勝利を得ることは国の名誉にかけて重要な意義を持つものなので、熱狂的な騒ぎが始まる。まさにラムンチョは神のような存在となった。面識のある者は彼に近寄り、友達であることを宣言し、抱きしめることができることを心から誇らしく感じるのである。ラムンチョは押し寄せる人々、熱く話しかけてくる人々をなんとかしてすり抜けようとした。

突然、それまでの熱狂的な興奮は消え去り、辺りは魔法にかけられたような静寂となる。村の鐘楼からお告げの祈りの時間 Angelus が来たことを知らせる最初の鐘音が響いたのだ。年老いた片目のスワーヴ兵が現れ、石段の最上段に立ち、戦の召集に使われていた古いラッパを高々と鳴らす。すると女たちは跪き、男たちは脱帽して恭しく身を屈める。先ほどまでの騒ぎが幻のように静まりかえり、厳かで敬虔な雰囲気の中、ラッパは鳴り続け、人々は少しだけ口を動かしながら声を出さずに百の祈りを唱える。誰としてこの神聖で

不動の空気をかき乱す者はいない。

祈祷が終わり、人々の間では別れの挨拶や抱擁が交わされ、辺りに再び活気が戻ってくるが、同時に静かで穏やかな夜の帳が下りようとしていた。ウスルビリュ村の選手3人はラムンチョらと別れの握手を交わし、「次の試合ではきっと勝つよ」と意気込み、荷馬車に乗って村を後にする。

グラシオーサは女友達と別れて家に辿り着くが、すぐには家に入らず、階段のところでぐずぐずしている。恋人ラムンチョが来るのを待っているのだ。そこへラムンチョがこっそりと姿を現し、グラシオーサに合図をするが、母親ドロレスに見つかるのを恐れるグラシオーサは、用心深く慎重に小声を使う。ラムンチョはグラシオーサに見せたい手紙を持ってきた。乳母ピラルルの夫がラムンチョをアメリカに呼び寄せたという内容の手紙であった。

「兵役が終わったら、すぐに結婚して嫁さんといっしょにこちらへいらっしやい。財産はあるが、そろそろ私も一人きりでは寂しくなってきた。そこでお前たちを養子に取ろうかと考えている」

グラシオーサは、ラムンチョとのアメリカでの生活、夢のような話を聞いて幸福感に浸るが、突然母親ドロレスの声を聞き、慌てて家に帰ろうとするが見つかってしまう。貞節な修道女かのように黒ずくめの装いで現れたドロレスは、グラシオーサに怒りの言葉を発し、挨拶しようとしたラムンチョを全く無視して、荒々しく窓を閉めた。

ドロレスが繰り広げたこの光景を見ていたエチュサル村の司祭が、恥辱されたラムンチョに近寄り、「神を信じる者は誰でも救われる」と励まし言葉を与える。司祭はグラシオーサの家に住んでいるイグナシオ伯父を訪ねてきたところだった。司祭とイグナシオはドロレスに気付かれないよう留意しながら、ラムンチョの生い立ちについて話し始める。

かつて、金色の髭を生やしたパリの男が、気まぐれからうら若い少女フランシータを騙し、子供を作させた末に、見捨ててしまった。フランシータは村には帰らずパリで暮らしていた。この村に帰ってきたら、皆に嘲られ、侮辱されるのだ。それが怖くて乳母のピラルルに子供を預け、隠れるように村に帰ってきたのは一度きりであった。その時、涙ながらにイグナシオに頼んだ。「お願いします。この子の父親が誰であるかを知っているのは、あなたとピラルルと司祭様だけです。赤ん坊本人すら知らない。私の犯した罪がこの子の身にも降りかかりませんように」

司祭は、フランシータが息子のために10枚のルイ貨幣を送ってきたので、イグナシオにそのお金を預けよ

うとこへやってきたのだった。イグナシオはフランシータのことを不憫に思いながら、その金を預かる。

その後、窓が開き、清楚な白いドレスを着たグラシオーサが、窓台をすり抜けて外の長椅子へやってきた。そこで用心深くうずくまって、恋人ラムンチョが密輸団愛用の足音のしないエスパドリユを履き、機敏な足取りでやってきた。姿を見るなりグラシオーサはラムンチョの腕の中へすべり込む。しばらく言葉も交わさず、情熱的な抱擁でお互いの意思を疎通させる。どんなにお互いを愛しく思っているのか、言葉では表現しがたい気持ちを伝えあっていた。但し、この密会を人に見られてはならないと、いつも耳を澄まし、びくびくする二人であった。逢瀬のためにどれほどの工作をしなければならぬのか。やっと会えた時の喜びの大きさは何事にも代え難かった。

戻ってきたイグナシオ伯父の気配を感じ、グラシオーサはリスのような素早さで、ラムンチョに別れも告げずに窓台に飛び移り、慌てて窓を閉める。イグナシオは、木の陰に隠れたラムンチョ、伯父をごまかそうと針仕事をしていたふりをしたグラシオーサの二人を、ドローレスに気付かれないよう外へ連れ出した。イグナシオはラムンチョに海軍新規入隊の話を持ちかけ、それが近日中であると告げる。突然の話に驚いて泣きじゃくるグラシオーサ。ラムンチョはグラシオーサを慰める。「共に夜空の星を見上げて、離れていても空に光るあの星を見よう。星に向かって言葉を告げよう。眩しくて仕方がなくなるまで見よう」

イグナシオは恋する若者たちに目を細め、自身の昔の恋路を思い出す。

九月の穏やかな夜、月が西の山端へ沈む。

### 3. S. Donaudy “Ramuntcho” 第1幕

前段では“Ramuntcho”第1幕のあらすじをまとめた。S. Donaudy がどのような音楽を付していったのか、ピアノヴォーカルスコアを参考にまとめる<sup>7)</sup>。(括弧内の数字は楽譜に示された練習番号)

#### 第1幕冒頭～p.10 最終小節

8分の10拍子 Allegro festoso (in due)  
闘牛を思わせる、男性的で重厚かつ敏速な音楽で始まり、幕が上がるとプロット競技の白熱した場面が展開される。

#### p.11(10)～p.17 1段目最終小節

4分の3拍子 Presto e agitato ♩=208

4分の6拍子 Più mosso (moderato in due)

短い休憩時間であるためか、前部分と継続したスピードを保って、知らせを持ってきたイグナシオ伯父がグラシオーサとラムンチョを喜ばせる。

#### p.17(15)～p.38 最終小節

I° Tempo, sostenuto

再び冒頭のリズムが戻ってくる。試合が再開しラムンチョが決勝点を獲得するまでの、観客たちの歓喜と高揚を8分の10拍子の躍動的なリズムで表現する。試合の興奮が最高潮に達した時に、Più vivo, con veemenza となる。そして全員の合唱“Viva Ramuntcho Viva!”「ラムンチョ、万歳！」で終わる。同時にグラシオーサは“Angelo mio!”「さすがは私の愛しい人」と、3点C音(c<sup>3</sup>)で歌う。

この部分までが第1幕第1場と考えられる。

#### p.39～p.40 最終小節

Moderato Marziale 4分の4拍子

突然の静寂、舞台裏からの鐘の音。お告げの祈りが始まる。グラシオーサがこの習慣を知らないよ者の女に小声で説明する。

#### p.41(31)～p.48最終小節

Andantino ♩=66 4分の4拍子

Moderato ♩=92

Allegro giusto

祈りが終わり、夕暮れになり、それぞれ帰途につく。次第に速さを増す軽い付点のリズムは、帰るウスルビリュ村の選手たちを乗せた荷馬車の鈴と、彼らが勝敗のことを既に忘れていたことを特徴づけている。

#### p.44(33)～p.49 1段目2小節

Moderato

Allegretto ♩=116

辺りは静かな夜になり、8人の密輸入達・イチョウア・ラムンチョが集う。今日は月夜で仕事が出来ないと、再び立ち去る。

#### p.49 1段目3小節～p.55 3段目最終小節

Allegretto grazioso ♩=120 4分の2拍子

Più mosso ♩=160

Allegro giusto ♩=132

Allegro con brio ♩=152

ラムンチョがこっそりとグラシオーサの家の前に現

れ、乳母ピラルの夫からの知らせを伝える。早く手紙の内容を知りたいグラシオーサ、いつ厳格な母親ドローレスに見つかりはしないかと、息せき切って対話する二人が描かれている。ここで“Fatto che avrai il soldato, infretta sposa e vieni qui con tua moglie”「兵役が終わったら、すぐに結婚して嫁さんといっしょにこっちへ来なさい」の部分に、フランス国歌“La Marseillaise”の冒頭のメロディが使用されている。ブッチーニの蝶々夫人(1904)に影響を受けたのであろうか<sup>8)</sup>。フランス国歌冒頭の歌詞は“Allons enfants de la Patrie. Le jour de gloire est arrive!”「さあ行こう、祖国の子供たちよ。栄光の時が来た」であり、渡米を夢見る二人にふさわしい内容であったのだろう。Donaudyはこの部分にAllegro giusto ♩=132と記し、正確かつ厳格なテンポを求め、フランス国歌に対する敬意を表しているのではないかと考える。

## p.55(44)～p.57 1段目最終小節

Allegro mosso ♩=144 4分の4拍子  
突然、母親ドローレスが現れて、グラシオーサを叱咤する。

## p.57(46)～p.59 3段目1小節

Andante lento e sostenuto ♩=46  
Allegro vivo, un poco agitato ♩=192  
Andante sostenuto ♩=63  
Allgretto con moto ♩=144  
ドローレスに侮辱されたラムンチョの所へ司祭が訪れ、慰める。

## p.59(50)～p.61 最終小節

Presto  
イグナシオ伯父がグラシオーサの家から出てくる。ここでもドローレスの目を盗んで、イグナシオと司祭の会話が速いテンポで進む。

## p.62(52)～p.67 1段目最終小節

Andante con moto ♩= ♩ 4分の2拍子  
Moderato ♩=112 4分の4拍子  
Andante ♩=58  
イグナシオがラムンチョの悲しい生い立ちと母親フランキータの過去について朗々と語る。

## p.67(58)～p.68 3段目2小節

Allegro giusto ♩=126 4分の3拍子  
Poco più mosso  
再び司祭は急いだ様子で、フランキータから預かった

お金のことを説明する。

## p.68(60)～p.69 最終小節

Andante lento ♩=58  
Andante garbato, con moto 8分の6拍子  
イグナシオがフランキータへ対する思慕と後悔の気持ちをあらわにしながら立ち去る。  
ここまでの部分を第1幕第2場とすることができる。

## p.70(63)～p.75 最終小節 LA NOTTE

Tranquillamente mosso ♩=92  
この部分は終始静かな3連符の連続に支配された音楽のみとなり、場面の進行がト書きによって詳しく説明されている。LA NOTTE:「夜」と冒頭に記されているのも特徴的である。この部分から第1幕終わりまでを第3場と考える。

## (63) (64)

舞台上に誰もいなくなり、輝く星空と虫の声が辺り一面に広がる。時々、木管楽器が星の瞬きを表現しており、印象的である。蝶々夫人の第1幕フィナーレ“Or son contenta. Vogliatemi bene.”「とても幸せよ。愛して下さいね」の箇所類似している。

## (65) (66) (67)

グラシオーサがそっと家の前に出てきてラムンチョをじっと待つ。和音の厚みが深くなると同時に次第に音楽が動き出し、グラシオーサの不安と期待の気持ちを表しているようである。静かな闇夜の中に、グラシオーサが清楚な白いドレスを着て現れるこの場面は、第1幕中の見せ場の一つであると考えられる。

## (68) (69)

Largo sereno ♩=48  
ついにラムンチョが現れ、言葉を交わさず長い抱擁をする。それまで支配していた3連符がなくなり、印象的なモチーフの連続によってこの2人の場面を表現する。このモチーフは第3幕の終わりに再び出現する。

## p.76(70)～p.77 最終小節

Moderato un poco sostenuto ♩=92  
人の気配を感じるが、イチョウアの歌声だと分かり安心する二人。シンコペーションのリズムが終始続く。

## P.78(71)～p.85 最終小節

Andante lento e sostenuto ♩=42 4分の3拍子  
Poco più mosso 4分の4拍子  
A tempo, muovendo 4分の4拍子

Andante con larghezza ♩=52  
 ラムンチョとグラシオーサの幸せの2重唱  
 ここで初めて二人が揃って同じ旋律を歌い、気持ちの  
 同調を表現する。

p.86(79)～p.91 2段目2小節

Prestissimo

Moderato 4分の2拍子

Andantino garbato 4分の4拍子

Allegretto ♩=108

イグナシオの帰宅に驚き、即座にその場を離れる二人。イグナシオは二人を見透かしており、寛大な心で二人を自分の所に引き寄せる。低弦楽器のピチカート  
 の軽快なリズムに乗ってラムンチョを問いつめる様子「月夜に密輸の訓練ですか？」は、イグナシオの人物を表す、非常に面白みのある部分であると思われる。

p.91 2段目2小節

イグナシオがラムンチョの海軍入隊のニュースを二人にそっと打ち明ける場面。全幕の中で唯一、レチタティーヴォ的になっている箇所である。

p.92(85)～p.95 1段目最終小節

Mosso e agitato 4分の2拍子

グラシオーサは、別れを余儀なくされる知らせを受けて悲嘆にくれる。

P95(88)～第1幕終わり

Largo sereno ♩=42 4分の4拍子

ラムンチョとグラシオーサの別れの2重唱

絶え間ない6連符の連続にのせて、前出した抱擁の場面 Largo sereno ♩=48と類似したモチーフを使用する。それは前出のモチーフの小節（2小節）を2拍ずつ逆行させている。

二人は「離れている時も互いにあの星を見ましょう。毎晩必ず、あの星を」と歌いながら舞台を離れる。この部分はプッチーニ「ラ・ボエーム」の第1幕フィナーレを思わせる<sup>9)</sup>。前作の“Sperduti nel Buio”においても、第1幕の終わりに同じようにソプラノとテノールの長大な2重唱がある。この2重唱に記された最後の発想標語が、Largo serenoであることは興味深い。

第1幕を概観して感じられることは、前作“Sperduti nel Buio”と同様に、プッチーニの影響を強く受けていることであろう。しかしながら、同時代の他の作曲家と比較して、必要以上に多いと思われる楽譜上の言葉による、音楽の流れ、方向性の変化<sup>10)</sup>が、当時の

批評家の酷評につながったのではないかと想像できる。

#### 4. 原作 *Ramuntcho* との相違点

本稿では S. Donaudy のオペラ “Ramuntcho” 第1幕の内容を概観した。その結果、Pierre Loti の原作 *Ramuntcho* との相違点が存在することが明らかとなった。最も大きな相違点はイグナシオ伯父についてである。イグナシオはグラシオーサの母親ドロレスの兄であり、母娘と同居し、密輸に手を汚して亡くなった父親の代わりをしていた。そして、イグナシオはラムンチョの母親フランシータの辛い過去を知っており、昔の思い出を想起する場面もある。しかし原作においてイグナシオは、フランシータの兄であり、10数年前より行方不明であった、という設定である。原作においてイグナシオは話題の中にしか登場しない。原作においてフランシータは15年前にバスクに戻り、息子ラムンチョとひっそりと暮らし、ラムンチョが兵役を終えて戻ってきた時には病に冒されており、他界する。

また、ラムンチョに、結婚してアメリカへ来ることを提案してくれたのは乳母ピラルルの夫からの手紙であったが、原作ではイグナシオからの手紙によるものである。

このように台本作家 A. Donaudy が、原作の一部を改変したことの意図を、オペラ作品としての価値の探求という観点から推察する。おそらくイグナシオ（バリトン）を、ラムンチョ（テノール）・グラシオーサ（ソプラノ）と同格のメインキャストとして位置づけることを考慮したのではないだろうか。原作においては、ラムンチョとグラシオーサの二人のみが印象的に描かれているように感じられる。イグナシオは各幕で登場し、単独のアリアとしては書かれていないにせよ、各幕に長い独唱部分が配されている。実際にピアノヴォーカルスコアの PERSONAGGI（配役）には、イグナシオがラムンチョに続いて2番目に記されている。

次稿においては、第1幕以降について内容分析を行い、更に理解を深めていきたいと考える。

#### 5. おわりに

本稿では S. Donaudy のオペラ “Ramuntcho” 第1幕を概観した。その際、原作の内容に踏み込んで考察を進めることが出来たのは大変有意義であった。Pierre Loti の *Ramuntcho* は、フランスにおいて1918

年, 1937年, 1959年に映画化されている<sup>11)</sup>。A. Donaudy はオペラの台本のために原作を一部改変して脚色し、イタリア語の “Ramuntcho” を訳出した。上記3本のフランス映画作品の内容を調査することが可能であれば、S. Donaudy のオペラ “Ramuntcho” に対する、更に深く掘り下げた見解を得ることが出来ると思われる。

## 【注・引用文献】

- 1) 枝川一也 S. Donaudy “36 Arie di stile antico” 研究Ⅰ ～声楽教育の視点から～ 広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部第50号 2001 pp.351-358
- 2) 枝川一也 S. Donaudy “36 Arie di stile antico” 研究Ⅱ ～声楽教育の視点から～ 広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部第52号 2003 pp.325-333
- 3) ト書き stage directions (英) 脚本で、台詞の間に演技者の動き・出入りなど演出を説明したり指定したりした部分 「・・・ト叫んで退場」などと書いたことに由来する。(オペラ辞典 音楽之友社 1993 p.336)
- 4) ピエール・ロティ作 新庄嘉章訳「ラムンチョ」岩波書店 1993 (第三刷) では、グラシオーサはグラシューズ、フランシータはフランチタと表記されている。
- 5) tranquilles puissances blanches LOTI, Pierre RAMUNTCHO CALMANN-LÉVY ÉDITEURS 1925 p.320
- 6) 前掲書4) p.255
- 7) S. DONAUDY CANTO E PIANOFORTE RAMUNTCHO G. Ricordi & Co.
- 8) 「蝶々夫人」第1幕において、オペラの音楽の中

にアメリカ国歌と日本国歌のメロディが盛り込まれている。後に主人公が両国の文化、気質の違いにより悲劇の結末を迎えることを暗示していると思われる。

- 9) 「ラ・ボエーム」の第1幕フィナーレにおいて、ロドルフォとミミは歌いながら退場し、舞台裏から Amor! Amor! と演奏する。
- 10) 枝川一也 S. Donaudy “36 Arie di stile antico” 研究Ⅳ ～オペラ作品との関わりを視点として その2～ 広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部第57号 2008 pp.351-358
- 11) 1919年作品 監督 Jauques de Baroncelli  
1939年作品 監督 René Barberis  
1959年作品 監督 Pieere Schoendoerffer

## 【参考文献・楽譜】

- DONAUDY, Stefano Opera Completa per Canto e Pianoforte SPERDUTI NEL BUIO G. RICORDI & Co. 1906
- DONAUDY, Stefano CANTO E PIANOFORTE RAMUNTCHO G. Ricordi & Co.
- LOTI, Pierre RAMUNTCHO CALMANN-LÉVY ÉDITEURS 1925
- LOTI, Pierre (Tr.) Henri Pène du Bois RAMUNTCHO R. F. FENNO & COMPANY 1897
- PUCCHINI, Giacomo RICORDI OPERA VOCAL SCORE SERIES *La Bohème* CASA RICORDI 2001
- PUCCHINI, Giacomo RICORDI OPERA VOCAL SCORE SERIES *Madama Butterfly* CASA RICORDI 2001
- 落合孝行「ピエール・ロティ 人と作品 増補版」駿河台出版社 1993
- ロティ, ピエール 新庄嘉章訳「ラムンチョ」第三刷 岩波書店 1993